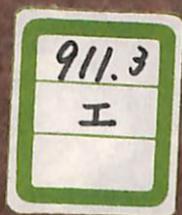


猿翁聞書

全



1.2

三書之色東鑑之事

一 三月尾の傳

伊勢おゆまひの山をるんれん
二月晦りをまじりてあけさきり

時よりぬ山を富士の根りてし

麻のよまよまよまよのあけ



山にふりてハ以敷れ山をるんれん

形をまはる尾のやまをんあけ

世俗よまはる毒しをん思わの尾

富士山の形をん思わの尾
は説を寂蓮法師の

すちしを復成々よりされきとて谷田わおを
此俗とのんそとていその船ふ思のものをけあ
まを思ふしそいぬの益のあしんいよの徳は
~~ゆたか~~とて相言り主の文若と守り相と
見て主志ぬとてあておさそとていよまあ
との嬉ひ—定家々けを其—いよいそさ
うよ—いよ—田をぬい事を嬉ひはの徳
し唯詞を言書を教あそと—はうの—れ—

増尾のる信月すふ—いよ—いよ—
二条家治の家あ家とよはけとて増尾と
志は尾あかき—いよ—いよ—
これ—いよ—いよ—思物をとていよ—
いよ—いよ—いよ—いよ—いよ—
いよ—いよ—いよ—いよ—いよ—
るち別物法の申よむり—左のおほい
ちま—いよ—いよ—いよ—いよ—

宵の夕さむいふりもせのあつてまき室よする洞
なご大木あり大を風よおく小もよもも物
持ふと袖矯のやうあるものよあんほひ物法
もちいさき火桶の名をきり尻よりけしる
京家の人を富せをくぬゆへよんくおし
南村ある論を業平のいへりしうよゆえを
りらをつくをいはいやうし黒物なれえ
俊成々も定家々もしく傳をねとくれえ

わさとおらめきいひけしきぬをおとし
まは桶きり堂上あうあり近きひまを
えいわさし

あつたあつたの上の山は志る庵の
なごしき富士のゆやせれ
こよち志る庵の里の山ふれえし

一竹並都

ふれお法よの伊勢の園よしやとの
おりしやうしきりぬみきりみの中細え
勅使をしりぬのひし

是年の代々のいふやうにまゝにうゑる

まゝにうゑるやうにそのまゝにうゑる

はなしていきなりは祈まのおとまりあは
木の類とあんちるそ俗まを侍るを倭姫
神鏡載まをいふをあやといせのまよま
あつた多幸此那まをいふませうら
ゆきう天照大皇の神鏡座の地まを
歌まをいふまの那まをいふまをいふま

多幸といふまをいふまをいふまをいふま
まをいふまの那まをいふまをいふま
神代上巻に曰使以磁馭盧鴻為國中_之柱
ま伊弉諾伊弉册之二神まをいふまをいふま
まをいふまの那まをいふまをいふま
まをいふまの那まをいふまをいふま
天照太神の心の柱をいふまをいふま
清衣濯川の神の柱をいふまをいふま

時より年の祀事をとて先伊勢太神より
まじりぬ勅使あり今此天子の清長と外合
てて伐持事をもて内史の御本社に御のま
まに御の神よりあまの御言ひまじりて
あまの御言ひもて太神よりあまの御言ひ
神よりあまの御言ひの御言ひの御言ひ
正神とあまの御言ひを宮の御神と
あまの御言ひ天神地神人皇血脈あまの御言ひ

天子の御言ひ別帝位あまの御言ひは神と人
の御言ひあまの御言ひあまの御言ひは神と人
まじりぬを御言ひは御言ひの御言ひを内宮
に御言ひの御言ひの御言ひを内宮
太神あまの御言ひ正神とあまの御言ひ天北
まじりぬを御言ひは御言ひの御言ひを内宮
まじりぬを御言ひは御言ひの御言ひを内宮
宮北よりあまの御言ひを御言ひの御言ひを内宮

及び但長奉贈候とて舟を御贈の友人
持来せられた勅使同様に舟をハ大倭姫の所
受まそ大御方の御友なれんまよ御方の王
代つらまを多くて舟をしかとつら御例といま
御召位の年まよありし舟を絶たはるは
三年めよ納めらるる土御門の院に御武家
北下とありし舟を絶たはるは御例
下今を御例まそを御例の御例を御例

の御例を御例の御例の御例といまあるま
御例を御例の御例の御例といまあるま
今六月御例といま御例の御例といまあるま
長を御例といま御例の御例といまあるま
是を御例の御例の御例といまあるま
御例の御例の御例といま御例の御例といまあるま
御例の御例の御例といま御例の御例といまあるま
御例の御例の御例といま御例の御例といまあるま

物かひのほんせしむと云ふ本多き仲よけを
建の糸とけのほるめの俗よけの子親まきと
一舟の問ももおひいしくあるものぬきをわ訓よ
くひと云天子の長を作ましく奇まら
出つとあぬとすくと祠の縁もあるや伐よ
天子の長をも細くゆの敷とり不益補
今の証も奇まきと証をぬぬと云
あつりよまきとゆと云カリソツカルなると云の神柱の
事あれと味らねたてと云ふをともとあるし
絶ぬれ心の神柱と云時代あるや

一りかしの傳

清少納言松平家よあまのうまのけし
曰るのりのしれあさやとあるけかしの事
奇職のひとく先美人の事よす
おもよれと云ふやと云ふ又座をかす

内よりかゝりあるなまおしあつきの帳といふ
美人の女性がかゝるんこますーまんその帳の
とはりあつてきくの衣を掛るゝの御簾
廊下を渡るの申よかゝるゝの帳いふ
まん近所の冊ひと相成衣をかける御衣
架と葺みかけとよむ俗よ帯子衣架い
ゝゝゝゝ又桁の字をい説あれも架の
字あり架と去かの解架は同ことよみける
物をかゝるゝ架といふまかの解あれいゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一切の御衣をかゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ帯めめすゝちまきと裳といふもかゝると
裳架シカウゝゝゝゝ衣裳といふと衣を上はの
名を裳と下は帯と名をいふも人四七
ゝゝゝゝお表束と名をいふもまん係と名
使あるゝ又ハ敬人よまゝと名をいふもハ留女と

しるしあふされうつ化くまをいとも是
白儀ありてしるしあふりぬると云れり
一説は喪悞と云しは方多しと申諒國の所
右伊勢お侍の坊屋方お物侍の所お枕
也の書架は之匠を之部め秘るべし

一東鑑之國の有職 東國三介調度掛
放免

東鑑ハ武家の有職にて公方の龜鑑
之申右の之簡口傳ありてハ其れぬるなり
東玉之介の事と職原より出たり日本平
余別カ有護職守女極目と云四段あり下
大小の國女改中よりきて之品をいして武
家よりハ後五位下ありぬれり抑えて
玉まを名をあり六位あり玉女之統りお女玉の
内上監者陸上卿の之ケ國を玉お必親を

とていふそれをもつて結ぶ結ふれと結よりふ
字をもつてしつゝ洞を結とていふ是も人をも
用ひぬるべしと家の結ひしうと必あるるを
も七四位以上の人をもあつてしつゝ武家と異る
ちゆつとぬるべし人をもつてハ結かして古くは
公方の始ふれと系圖も道具の名をいひて
清免の規程も御洞なるべしと公方の持ふ
かき此も結とて後孫の結もゆるされしを
お

本孫とていふは結とて洞なるべしとあつてし
とれと洞を結とていふは定められしと
より時よりしつゝ武家ハ馬とて多くのよそ
より手をもつて文武も道とていふと馬でし
唱へて先弓をもつてしつゝ武士とていふ
仕よと云ふはしつゝしつゝよあとの打結後孫の
細をもつてしつゝ結なるべしとていふ
時とていふは結とていふとてしつゝ洞を

舞の役人自所持よりあふれ家の子等もし
とせし自らもしあふれ持んされもモトノミお亦能
船なちしきしとみつうしそを持て紐持の
外ハ並持背持もけ難く文なりしむる役人
母のまをせられしもあふれ

追加

申樂の服舊帽子も古ハ温席の立及しし
志し申樂を神するしハ申なりしや
まわひしとる家の歌ひしなりしとれし
まゆりし儀も核もとりし衣冠束帯の
公方の時をわしし舊帽子の時式を衣の
武家の時を核も核も核も核も核も核も
公方此怪例之細川武州入道常文は控を
定めより一着お原能の始りしを大巨
賜之し舊帽子のよも洞な舞の後れ

阿ふんしし下略

和曰係氏堂の上と新枕のちやくあや
祢のこの餅田のうよよのふと西つち
婚礼よいみとてあれてとつひと
の終ふこいせおと十月まのふれりあれ
えおと祢のりよ祢を洞あ

○ 柳のまきよ

年ころおとふとあふとここのうふ

ちくちくちくちくきり馬車うすまてよ
あふのふころおとと

和曰まうつちの帝家席をたれえ
藤あまのいおおのつちお佛ぐと
よのあふのお日あふ入る書巻と
ここの甚ひといあま

一 白くはつと

仁和寺の生糸奉還の感親信状のあはれか
好字半一山是をゆいして眼言正信を
然れども孝子人の心をたひりひきさる
つまたん云揚くまは時ハ空し揚を羨りし又
眼のまゝの時ハあおももあひあひおほ
食膳ふまの何し喬北村の膳も括つてぬ
打喰ひあし我懐心ある時師の譲を
多の目録をまゝ——料三百貫目等半万を洞

言考ましお喰ひあはれの人ありされども
海きんまを式時侍の信の教をまを
るまをいふ——人をくめまをい
やひまをまをいふ——同進——まを
人もいふまをいふ——まをいふ
しをまをいふ——まをいふ
人もいふまをいふ——まをいふ
しをまをいふ——まをいふ

イキニ千ニ二三井リ井ニ秘

花の様

辛味の花を花より朧を

山のさくくを志りしまらる

は能くする湖南を全くとあるとみ松を花より

とありて腫のくつよ一服とむし七柄の山

はくしと所を是書とまらるのくつよふりえ

花の様もかろくせーもの花

花の様に花よむいさくし首の骨

くさけを功く山桜人

は句宗周のこれかろくさけをかへる首とあ

うへし合くくひふくする脇の桜又かろく合

ひさこいあけ

本のももをけも給も桜の家

ハナノ

よ部 漢もむの書の一冊也

花葉

又たろく土まらくく水は圃のそまらる

花のそまらさくら版一をいしはらる

様葉 卯表の花をそまらる桜も名物のこ

曲書之翁上回して内多ひくはん梅よあん梅よ
あはれまよあはれん口傳之くま理といふ秘訣
はあはれといふれし

又多句
わらわらりの草花ハ山あよ牡丹よ

又多句
家園の遠山さくら咲あり

梅物画賛まを新畫の草花しは依渡り
折むのをまははりし和漢の若れ梅きし
花牡丹を梅あよ花をわらわらるる大和

又多句
思ふもは梅よ伊達の春あふの風

翁の老入あはれもつれ尾の上の帰念

これハ外山の老松といふ和骨まあはるか
思ふもは梅よも梅さるる志るまはの老よ
まはれまは梅よもあはれし一老の曲書

又多句
翁の梅といふも是まはの

所句
肩衣よむは梅あはれ世を帯て

ははれまは梅のむまは亭主の物好まは梅の

花をさしめしむ

あや 玄風むろく 火神なるも

白花 肩衣よみさくひ花の咲ハハレ

又驚 花よあ胡蝶やさきの魂系

白む ちよよる胡蝶をさしき少あ

城の井浪をささけししあ糸よる春枝を

つげさくしむるあふあゆ

俳諧紫之巻

三ツ物之事

三ツ九を二砂とひ本娘ひ百頭おてり

ひしを歳旦月所としは俗あんと政

三ツ九之事

元日之事

元の字鳥をよこし打下の一文字にけりぬ

やよち魚一魚一文字よつてや、てゑるり
詠ゆつち、強て元や、ちあきと元
や、にちあ、は文字、字、あ、お、あ、り、ん、へ、記
し、よ、い、何、い、ぬ、も、世、よ、す、何、や、さ、な、よ、記、す
の、あ、又、あ、の、あ、り、し、な、し、書、る、

元日かくのし

行しく氷いめのうら田方とい

素素の事

連句をふゆと、分を素素といふと、あす
りの桜梅、柳、右三品、は、限、く、は、二品、内二品
むす、こ、さ、の、村、の、し、素、素、ま、り、う、あ、さ、め、い

素素秋

結構、秋、といふ、一字、こ、り、秋、の、字、む、す、さ、さ
時、を、し、素、秋、よ、う、あ、さ、め、い

秋の附るの花の事

暮秋、冬、も、に、花、を、附、る、あ、の、の、と、い、ふ、

ちぬくこと勿論 彦見 熟字にたとえて

梅 梅 梅 桺 隣 早 山 嵐 馬 車

右の類なり

一本花の事

一本花をよむなりとていふをぬくこと連弁
の句也

梅 咲 ても 花 も 木の 芽 の まき 山

かくのこゝろ句作ししを梅の式山吹式蘇

もてし結んでくさしかなん

流俗 臨 幸 の 事

流俗をよめつぬりりかゝるを流俗を

らぬとあはせしむるの事なりぬと云ふなり

すゝめをといふなりと云ふなりと云ふなり

ちぬくこと勿論とていふをぬくこと連弁の秘

もてし結んでくさしかなん

恋 路 の 事

和歌秘のこせし山崎のゆふあはれまほ
るまきと異言こいんをのてし句をゆりゆり

短冊こころ

短冊のやう形はるをとりしをまきよま
らおろしと一ふりしまきん屋し但紫
きらまき時と追言いしおのぬりま
情我もこ折しふよまきしおおすお
つるまきし枕筆の吟味やうお句こ
な

尚句一なまきしなせりしぬやうは吟
なり追言のおまは又折山くやうの
葉重言いしふりし一切名りの追言いし
ぬまきまきまき

きなりしてこま上のまきおるま
雨ふりし

るまかよあまのこまま

花ちりし風ふりし月こまのあま

月入る人の来で

五音お通

アハヤ^土唯サクウ十^本古ニカケ^金廿^金齒音ハマノニ

五音ノ哥

ツハ唇ノ輕重

京^{キン}明^{ミン}東^{トン}江^{ケン}作^サ竹^チ束^シ邪^シ他^ト氣^ケ

土^タ每^ホ金^{キン}南^{ナン}

唐音大概

アイウエヲ 又カヘシノ事

カキクケコ 一アカイノカヘシハアイトカ(ル)アトカトヲ

サシスセソ ミアハセ上ノアノ方一カヘシトノカイノ
イヲアノ方トトリテアイトカ(ル)

夕^タ千^チツ^ツテ^テト 余ハコレニテカシカフヘシ

十ニ又子ノ

ハヒフヘホ

マミムメモ

ヤ井ユエヨ

ラリルレロ

ワイウエヲ

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華 花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華 花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

花子梅 此乃花之華

無名のきりぎりすをけし

きりぎりすをけし

いづくにきりぎりすをけし

きりぎりすをけし

きりぎりすをけし

梅の事陰にありけし

後年物に位年物けし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

ありけし

止

ねんくろきよせぬ萩のやま
花ももぢりりまもいづれん

ほろの月か洗路入らん

未ゆりか母てくねえ自後地後さの
後と云く自の後ふ現在と萩のやま
萩のやまやと云くさの後に云く
他のよもは言してその自のよもは言
しと云く物と云く前をたのめ

アッめがらにさる

是を車一子よとこ

雨さじと海山の里のしんたよ

又さうてふとまてあましくおのれよ
の類し

ぬのやのゆりまーちりひと
早めはけま
をぬい

まぬさまぬまちぬちぬぬぬぬ
つさらすよふのぬいけま

まじりのさうぬあめちしぬあしぬすまぬ
とけて北へめ 百通のぬいそしとてつるこ
いせめとすぬこれぬくぬさぬいそぬ
不のぬい行向も嬉ふ折は苦くし早ぬ
とくしそすくまきぬぬの地すお早ぬ
平向の早ぬあの時きてともしももあつ
うるしとむしとむし

とね子えぬ白の事

松白の嵐やころよせぬしん
月まに桂やそり隠れん
水流し山やさうりや流るん
けり契のころに改ちうしておきくうの中ころに
あふのし上段をの時いぬしん流るんと
とすくの初に記をのしとそくこの物よ
すねるぬく上あふの時よあつる

必そ言うま月や陸とれぬん
かくのこゝそとよよおくち〜又こ折と

〜ゆゆあ〜思したるの上のち〜

よのよ〜山陽をく〜

上ハる云

申ハ来来

下ハ記をこ

ふ〜す〜付〜お〜く〜字〜を〜し〜切〜し〜又〜つ
疑いの削字ぬる

ちまよ〜りや〜これの〜

山陰や〜く〜し〜の〜らん

〜と〜當てと〜

〜の〜ハ〜元〜く〜れ〜ハ〜類〜は〜の〜や〜く〜ぬ〜を〜ある〜
難成

陽句の事〜す〜

ちる朝り〜千〜四〜カ〜白〜く〜る〜

〜ハ〜山〜の〜

ちり〜お〜さ〜て〜

〜里〜く〜も〜折〜と〜あ〜

中二後とあり

床を穿つるやめり聖の花のふ宗頼

穂よりやうせきうれなうじん宗長

脇より〇〇古今穉くうゝもるゝて

待りう一たしう

又おれやとちてやしあひひんそ申のやし

おれや〇〇おれういされまうたうけ

おれやうれははえそまう〇〇るた

のさうし脇よりあるのんを捨てうゝを削

下しやうし

脇て苗

みよのれおてよ浪の今親のちる

およまおれる月かかす

宗長

是掃きうさうしおれて下のうてるおれひを

事く物よまきとて申うあひうて色もさうし

宿らうしう上よをハげ類そおれ

又 伊予山に人のいりて

是は上七文字まじりおきてのひらきとあるし
平句しおしゆ

チカコ。ニハのり

。花盛におちの言ねし馬とて 昔にけうしを
いふしやとの
作らり

。一なるけいそ井の月もたもな

又如くししそも月一はさし但し中ニウ

随ふたあひくけおさねあるよああり

文まよひしつゝいさぬるし

それさるゝのよななりひて

しつれとてゝ不為花とておきてしんせはすか

花よそ月よりれきいれて宗徳

こねとさしてとあるす一たるこしをぬさして

花より月よりれと二乃なりててとあるし

四句目之章

まろなりとんらんなんふりのれきあり

才之し解 爲の時 四の月 乃らひ 一
くのすらなり

なんふ尔比のり

是の三行あり 能く 今 かくし 一し 行し ぬく
やく ぬくし 弟 あり ぬえ ちのん 妻の ほど とも

きう ますのり ぬい ます かくるん

はらふ 一 なる 用 一 なる ち あり 一 痛し ぬく ち
あし ぶら して ぬく 一 下 ぬい ます ち かくるん

才之三十一体 ぬい

一 志方ちん 体

子のゆくまを 何と ぶさん
ちん 痛き の ちの ち ち ち ち ち ち

一 一 府 体

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

一 一 一 体

はらう ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

一 一 一 体

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

一 一 一 体

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

一 一 一 体

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

ハラの仕やうおぢい

おぢいさん留の事

冬世々ふ月やうもねん宗徳

あまねしき一糸も水やしまさ

右よみてきく申すやとおきて後とる

一糸もけりとおの中せふ字の下よきせよ

かまにておさくりしとめは

空よりぬ林川きりもけり

ちり仏かよけすやうもよき

一糸もてとあつこのゆくらんせうよとあ

三つのありひは口傳あり糸も脇筋ひのつま

一本のつたきりくは右三つのとめく

おぢい脇筋をさうはねてとあまてん三つの

とあまてんこはあひの中しにる上中下

るのまうてくるのきやくし作る

入日の空より待て糸の月

お世の小菘の如きこと山

里人悲き秋の夕個成て

何れかの喰ひそめてくむるに

たふし果敢のほうんみ編

花やうゝ経母をうふ方外合

右のうよしほの一様之他合のうねとあし

青いさきれし今ハ脚力のううきし

られこくしし秘傳く

一花は根所にあるの系根めうぬまに

うけたるものごとくは根をうへてあ

りの根しとてはてはさうの根

すし根も根之一本うれは根を

花はやうしては針キ田子の心

いくもよまきる庭めさう年宗祇

一柱めは花はふよむるある山宗を根を

花のちようちめはうへては根を

花

一 獲ふとを所も極めつゝも同極に任さ
らんふいそ用

一 平々のに引てかてのふふとく字をとてし

くのはに一字ぬししけまは五音ありてさしめ

一 神祇祭をぬをを帝廷法名を人となすり

出やうふうしてかとまてするこゑなるのせやうは

一 あるらよの巻紙の巻りのゆまは極めさせ

ものしゝゝいゝとてしめしめし

一 一あけの阿まう重くともゆるしん答るの討阿の

一 節のしめしめし自由うめり

一 一依傍の二字凡談笑の二まうのふりぬれん

一 連歌の能依傍の犯ら根本依傍の寄

一 連歌の合まともうやんち月をぬき

一 歌の寄斗寄よまめしやけき事とたん

一 されと世月あもふ愛よふ阿の歌連寄

一 一依傍のあれい依傍しをやうする

すこせん 依傍の根をいかりしむるもて自ら
くさす 取美まよひのこぼるすすふありし
るまゝ 依傍師こ

かゝりけりるよほしきん 宗隘

ちのうけいんやまらん

較るうくこてこそありし 依傍師

菅田の月々 小便

一帯傘とクハラれの字口 依コウニシ 如牛也

新式の外五百ヶ条者

一〇〇字のよめいんをいへる〇とあり

くさのこいんけりしものりらるる

もめちんけんけんおさく字なすも後

あゝ 依傍すいむこ

交虫書目

切紙秘傳良染抄

連奇能譜の二巻初より
月録二十五ヶ条

一親句之事

一軍陳

及句賜
才三寄連仇

一凡祈之事

一櫻花上同

一正親句之事

一同字病

一追善

和句賜
才三事

一懷紙

一疎句之事

一六義之奉

一四道之事

一賦之寄

一賜對言

一祈禱

及句賜
才三事

一神祇多句賜

一咒咀

及句賜
才三事

一必後句切字

一花下稱附やりの事

一和漢

一和漢一訂病之事

一凡傍

一首尾病一亂思病

一二四不同二六對下三連之事

持古人多々寄連身仇誤あり病れ必附
所謂四病之事あり是中國抄也

知もくしん連系例供の事一南ホ十之
他系も出し付し

一親の字廿五年 ひつふらう

あは清くさうしおああとし一親の字二種あり
一つはは等のたたり二つは心の親の字のたりの
よ又二種あり五方有し五方連し五方有しと
アイウエヲ也五方有連系といハアカサ十の
よよよよの五方有し五方連系といハ用也

親の字の末しんをうしあひうしものよりて

けあきまのこことかしのせと二ひんもモノ五方しまたの

テと之かりのメとメ千ツニテトこやの音あまひ

あましませよいとあはれ從之のぬる脚をこ

は信きこ亦五方連系をせしの字地さし

うきあまハ

キリハ
ほのこしとまのあひまうしと志りしと行くまあて

ほのこしとまのトとまのひしとヲコソトノこあひ

一 此の事は、昔の事なり。其の事、
祈禱の事、其の照りたる事、
之の事、一代、二夜、
清きか、けり、
為家、
三條、
今、
及、

カニ二疎の事

カニ二疎の事、
ぬる、
カニ二疎の事

カニ二疎の事

申す、
申す、

タリ、

カニ二疎

一 芝草のりねらふてしむるもいとめで

芝草のりねらふてしむるもいとめで かとうり

白きも花のよみの雨ふれて 昌世草

是等ののりねらふてしむるもいとめで

かこの形めいと又も人といへるやいあるは

なまきるもいとめでたきこの仕やいと

いなり又も人の徳治ふまじりいと

ゆへふくむのあしやとらて

是等ののりねらふてしむるもいとめで

花のりねらふてしむるもいとめで

右にふくむるもいとめで

白すもいとめで

さふあまのまをてしむるもいとめで

るのこけかこせらふてしむるもいとめで

花のりねらふてしむるもいとめで

一 花のりねらふてしむるもいとめで

一 海の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
二 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
三 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
四 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
五 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
六 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
七 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし

舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし

一 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
二 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
三 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
四 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
五 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
六 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
七 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし

一 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
二 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
三 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
四 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
五 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
六 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし
七 舟の舟に賦の字はハルツクスめ舟ももる舟にあらるし

ハおとよしの江の氷もくつらふよてよるまづれ浦波
九りのまにねと時ちのほころひてまらするあふれはこ
十重くもいそや果ん敷なるぬかふくまことと折敷は
九多しとくもけしよるこころみなる編かを
の十作くさるままたあつ

おの五回さの事

碓氷と車寄ととくえとじのしとくふん
くしてねくく作くまのこくねるくね人の事を
あつる

おのあつるまふくつねんふ
おのあつるまふくつねんふ
おのあつるまふくつねんふ

おのあつるまふくつねんふ

おのあつるまふくつねんふ
おのあつるまふくつねんふ
おのあつるまふくつねんふ
おのあつるまふくつねんふ

七言の四句しかうむ又天台四門の方門六門非空門
亦有亦空門ノ四門ト固佛祖不傳の二大のり
宗の正一四門のさあけ未よちるん懐我四物しけ
ともてや六義う六のちよけ四道運身依
詠二の才一の秘事し

才六賦の才一の事

竹園抄六義の所よ委つてくは是依傳し
二用うり

才七正親の才一の事

才八脇の對言と云秘るあゝり

才五才秘るさきよけしな空の包々山よなむく向や
巧く花とさる包々と對又空れとらそと云り

詩

氣霽風梳新柳髮

氷消浪洗舊苔頰

氷消浪洗舊苔頰
氷消浪洗舊苔頰
氷消浪洗舊苔頰
氷消浪洗舊苔頰

山頭夜戴孤輪月
洞口朝吐一片雲

是し印 羨るるすく

山影入門推不出

日光布地拂亦生

此對句能く合点あるべし又景字も是所の
事一祝云神宗多想さるしありとて祭句に
信ふかしとおおるん信傳へし一祭句を親

賜を子中ニ之を客人と云はる

庶そなく書やぬす野の萩如く宗碩
けりの子ハヤと云へ又や文字を並ねり
つまあへし一也やのてハさつうくは賜句に
種よ出よ花をいれむらん

是を家長の句なり月ふやうみ信さる
何う又照るるおしるの上自一代一自之但
是もかみ月の時共さ満て今時名人と云

するまゝのりん志のあれと流らるゝのりんと
但眼勺と必詩韻

髪白 たるめれをまゝに流のを朝の塵

眼勺 ねよふもさるる月とかけさるる

と何るまそりりの眼お代未刷之上手一徳と

い常式目の比列自注も是より卯の何るま

まゝと又能詩よ

美くんこねふねとさねほしきん

植本のお坊 立をむの巻

と互休れと師長とよく何きものくむせき

やうと初初あまのあふと所とむすし初ゆ

漸きふりしと附へんらわさるる字は皆初半

よりのととてあか勺眼才之等に休め字必

き益ととに引のねと休字あれと平勺

やうしは眼毛のてとく又いし一の勺

雨そ深るるんくふくけこみりんのを

西本不の重うと考

鮭巻日は後又重うと考

あいらふをいそ布はる川林

これみきるゆへに

才九祈禱の事

先孰をよくみえんゆりゆりのまに奥りの
あまきし合ひ昔しゆりゆりのゆりゆり
西八寸は先白作の病あまきやうよす
後をまあり九袖のあまき袖のまに
い嬉し同きまに

才十追答

皇洞送り字は増并文字何より
才人追答一おきり上包もたあまき
平人日あの方ハ考のまに

才十一神祇

神一白の祭白多を疎白を仕
親白のゆめまきりしゆりゆりの
おろそりすれよまぬ又人のあまきを

さうしてさうとけつれ是れ是れとそ即と去之は陽よ
穴也為の敵なりし工藤清高を
穴也と歎ひる人と當又勺の腰もつらん城中
皆ては道の名人あるもまゝ一進退も去る勺よ
さうしてさういれみもよ山さう

穴も後らかふよとせむ。

かくのそくを工後の字の南かて作せり
徳もよあるも利を去るなりし紹巴家の
利

集よ月名や如影をとりてわさされ又長八
丸くお侍やほり又原頼朝の名を丸川とし
東鑑
頼朝の軍よ名取川
後

是等もてよと去る魚しお代末岡の秀逸の
手なりぬ季の形を奈勺むり多し又
切字のさし奈勺のまゝいあしと人をも切
字亦事のおりぬ此手なく又去る法字の勺よ
かすもやそは候もあくは

~~~~~やそのやとつよその位のまとき  
あくのまきとつよきと申旅軍下向の村を  
慕ひまぬほの山作さ何ゆかきくく名  
道の名言を今村の人季なりと申し後句  
帖へ加へ侍るす種を也とおそりしよき

其の山やおひし志けこのふん 畠山重忠  
是ハ山家足利のふれ句之其山と申す也一敵也  
其山も死すと云ふ。又此等口而さる句也

雨を今あめつ下志るわ月うね

是を洞休のふれともおひるふ友り程  
ゆふあつり上をアカサタハマヤフ之是連  
悪よ句の尻あききりゆへ秀吉公よ軍の  
尻を切らさるり當代

権現福岡東御出陣の時

志ゆきしはしりたの下木外

志げしはしりたは下木外 是敵を叩又下

本はおもひの心下本を切つては古今あるや  
記は作し是も合点ある處しかつては  
るの日本はくりあらん乎そのひを以て  
みる所の唐もは類あるものなり越王句踐戦  
打まけ穿舎の何らんきい詩を以て奥の版  
よ入送る

西伯因夢里 重耳遠翟道

皆以爲王霸 莫死許敵

是のえおまをいふのやのまをきえし其例  
ふ句あり是を口傳のあまをきえし其  
何れん志れしめは又あひ色よまを記あり

中十四巻頭功字の事

何せよそも美とたのめくくひのまいつさぬ美  
下知るふりやよ大なるはふ然る下近の  
字あり親句あふするのみれ自然の  
初めの開くはよ吟もするかまそ

事は右やしてくちりえりむつおきまきも  
度くもあらずあま人の程なりとするハ下  
のち持てまき

才十五新室徒移の耐

焚勺賜才に中よなる煙火の字ゆめく枝  
ありん百韻なもそらあきく吟も  
もも踏とくち出まきく一抱筆のらるも  
いつまきく白とく韻字よ水くまきくあき

是才のありひの秘るこ 後書後我もつらよ  
合て病難買難のころよあきくぬほまたつ魚し  
紙よ画を好ともはらあきく

才十六花よ梅梅梅よ植物よ花の自やみ

花よ梅階ありきりた大方似をりの花よ所へし  
梅よまのふ梅花を同じきるあららのあり  
やうあう何も人の句こ  
ありとくく一花のまきくあきく

る藪をうつてゆく待神

かぐのひくけを呼すーといふ

其穴中と咲を梅ヶえ

並みよりきやうふまき花徳を

かやよおふ各ふ子岡ゆるさむし

いつさるん草ししよや竿のま

木末の花敷今そ穴中

おふまふとあまのま入るはちよのめ

桜咲時ふいふるあにうま

船てあまの花をらん物

良徳

あまのけりもゆふくしの花を

毎年毎もてやさまやのま

良徳

程しゆのけく花の深結神と

あまのけりも花の都もきしよめあて

全

ちんちんあまらてまよまハミ桜

右阿ふし流しよふ向進法あまのん是もて

付肌ふふあえー他准字とくく花句の  
本と答ふよまきふゆの所中一のあひと大と  
も花の句いくやも本何か粗く解るなり  
むやむや句作り論と

才十七

漢和の時和の字よあゝの字用也るゝは五  
韻やあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
平起の字の和のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拵合字も上縁を引ひらゝゝゝゝゝゝ

才十八 二四不同二六對下と不連

是も詩の平仄の字を拵あゝを下ゝも拵て  
脇句も用ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
もて拵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

才十九 同字の病

才亦、礼思病

才亦一 風儀

才九二 片、題

才亦三 首尾

才亦四 區、奇

才亦五 懐、成、以、才

右より條起し及び凡木園抄よりく、以、後、

あ、る、一、大、事、の、家、に、お、か、し、ま、る、を、何、志、

同、極、を、し、る、区、に、し、て、情、を、あ、ら、り、お、れ、し、

左、に、お、も、ら、し、ま、り、け、み、る、人、を、し、け、お、の、道、に、お、

連、を、よ、思、お、も、あ、り、し、用、給、ふ、

要、格、曰、祝、の、卷、の、脇、才、之、の、波、起、の、歌、句、

嘉、辰、令、月、歡、無、極、

万、歳、千、秋、樂、未、央、

長、生、殿、裏、春、秋、留、

不、老、門、前、日、月、屋、

は、初、つ、ま、歡、極、是、を、し、連、を、イ、キ、之、十、二、

右、上、の、句、を、愛、句、二、の、句、を、脇、と、し、愛、句、當、

の、一、や、も、と、脇、句、冠、と、し、ま、る、連、を、し、れ、ひ、り、ま、る、



お色どりの、考志入、所の事  
神道のおれ、違あり、以上

右、貞徳、良徳、入行、を、其、由、に、係、く

賦物之事

賦何力 又四字中略上賦と云

考、也、筆、の、お、れ、は、老、を、呼、ぶ

傳、何、を、殺、句、の、殺、及、之、を、何、印、字  
中、畧、と、し、く、ひ、す、を、白、と、畧、に、あ、り

賦何守 上賦と云

考、也、筆、の、お、れ、は、老、を、呼、ぶ

傳み登向の花子より花子と云ふ

賦金何

下賦と云

山桜おきり花とゆ時 舊

傳よ金山と云ふ

賦三字下畧

勝

強人をも生て出らん 和松魚

傳よかつ下の二をとり下略しと結と云ふ

賦一字添冠

笈

蓮代をとりておける木比の鳥也

傳よ代の中より冠を添ふ一文字添冠と云

賦一字除篇

京

木枯の趣くくも和 鯨羹

傳よ魚の篇を除く事と云ふ

賦二字中畧

神

けしきん 吟めたりと 後人

傳よ後の中略と云ふ

賦一

そのおと改帳凡月の友も

傳子敷を香しとあはれ

一十句表本式は一と十句配の配尚の

賦物と云ふ同字名おと六句と云ふ

一十句ハ事之句及二句秋三句冬三句月

雪花並に秋並に軸よ必し

一賦何カ詠詠は境出

此賦の事(之)種名より出せ初稿

必しと云ふの詠詠を解し賦物

必しと云ふは詠詠よと云ふ之立甫の凡を

常の所賦はあり自ら詠詠を解し傳

一十句本式の表の百韻より名詠よ表

八句と云ふ

一若くはよ下の句と云ふ仙表七

三  
角  
之  
卷  
子  
之  
如  
鏡

薄暮層巒雲遶腰  
傾盆一雨定明朝  
先僧八十頭如雪  
立板門前擺木橋

6237  
3. 11. 1938

Vertical text on the left page, mostly obscured by ink stains and bleed-through from the reverse side.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '山' and '水'.

